

李白と朝鮮詩歌文学

文道平・朴忠祿・宋連玉

はじめに

〔1〕

私（文道平）は少年時代につぎのような漢詩（作者不詳）を吟じた記憶がよみがえる。

李白騎鯨飛上天

江南風月閑多年

—李白が月と戯れようとして鯨に乗って昇天したために、江南の風月は暇な月日が多くなってしまった—という意味の詩であるが、李白は出自も死も、すべて伝奇に彩られている浪漫に富んだ詩仙である。また李白は腐敗しきった当時の政権に反抗し、塗炭の苦しみに陥った民を救い、理想的な社会を夢見たロマン派の詩人であり、放浪生活中、自然を賛美する詩を歌った豪放磊落ながらも道高な詩人である。

このような詩人が朝鮮の詩歌文人たちとどのような関わりをもったのか関連づけて見ることは、大変興味深いことであると思った。幸いに李白を専門に研究される朴忠祿先生の協力を得ながら宋連玉先生とともに「李白と朝鮮詩歌文学」を寄稿する次第である。

中国の唐は詩の時代だった。まるで夜空に明星が輝くように、数多くの詩人が輩出した。

その中でも、詩仙李白（701-762）と詩聖杜甫（712-770）は二つの巨星であった。いうまでもなく、詩人李白は天才的才能を持った偉大な詩人であった。彼の詩は浪漫的精神と手法が、高度に統一した個性的で、独特な詩世界を持っている。

本稿では紙幅の関係上、主に李白と朝鮮詩歌文学の関連性を、彼の進歩的浪漫主義詩歌と叙景詩を中心に考察してみたい。

李白は進歩的浪漫主義詩人であった。彼の進歩的浪漫主義は、屈原以来の進歩的浪漫主義創作方法を高い段階に引き上げた。

李白の浪漫主義創作方法は、自己の社会美学的理想が現実と矛盾した時、現実への不平不満と、自己の主観的に望んだ理想社会への憧れから生じたものである。李白は大鵬の雄図、すなわち帝王の補弼となって国に貢献し、民を塗炭の苦しみから救う抱負をもっていたが、乱世にあって、その社会美学的理想がむなしく壊れてしまった。たとえば玄宗の不正腐敗により退廃した社会を否定し、賢臣が出現して国を立て直す、あたかも堯舜時代のような理想社会を夢みた。

朝鮮において浪漫主義が明確に現れたのは、12世紀後半である。1170年8月、鄭仲夫の武臣政変以後、政権を掌握した武人統治輩たちが文官兩班に対する政治的弾圧と虐殺、蛮行をほし、いまにわたるために、文武兩班統治輩の間の矛盾と対立が一層激化し、社会的混乱が日増しにひどくなる社会的環境の中で、浪漫主義が形成されていったのである。

朝鮮において浪漫主義思潮、創作方法は海左七賢^①の詩人たちの詩にはっきりとあらわれている。

海左七賢の中心人物である李仁老（1152-1220）の詩〈人の世のいとなみが苦しい（続行路難）〉は海左七賢の浪漫主義的傾向の作品の中でも、代表的なものの一つである。詩では武臣政変以後、腐敗し、退廃した現実を批判し「乱世」を正そうとする熱い思いを歌った。李白の〈梁甫の歌（梁甫吟）〉を連想させられる。

二人の詩人はともにこれらの詩のなかで、現実を鋭く批判し、否定している。自らの社会美学的理想を現実と対峙させ、腐りきった現実を改革しようとする、燃えるような闘志と自己犠牲的精神を、われわれは詩の中に読むことができる。描写手法においても、共通して浪漫的な幻想的手法を使っている。詩人李仁老は、乱世を正すために「天上の扉を叩き、銀河の水を汲んで、この世の汚れを洗い流してしまいたい(我欲飄輪叩閭闔，請挽天河洗六合)」とした。李白は「天の九重の扉を開けることが出来ないで、額を叩いたところ門番が怒ってしまった。(閭闔九門不可通，以額叩閭闔者怒)」と描写している。李仁老が自らの社会美学的理想を実現できず、苦悶しながら「鞘の中に納められた二本の剣、怒りを晴らす(匣中双劍蚊龍泣)」と歌った時、詩人李白は「張公が研いでいた2本の宝剣のように^㉔神物が現れるのにもタイミングがあるように、賤民や漁師も出世する時勢に大人物は逆境に耐えることを知るべし(張公函龍劍，神物合有時。風云感会起屠釣，大人岬岬当安之。)」と歌っている。二人の詩人が、自己の社会美学的理想を実現できずに模索しながら、鬱憤を刀になぞられて描写する共通性を持っている。異なる点は、李仁老は「鞘に納めた刀の憤怒の鬱憤」のみを吐き出すだけで、未来についてのヴィジョンがないが、李白は未来の確信を持ち、未来に備えて刀を研いでいるのだ。その違いは彼ら二詩人が生きた具体的な歴史環境が異なるところからくるものといえる。

この時期、「海左七賢」詩人と彼らの影響下にある詩人たちも浪漫主義作品を創作した。金克己の〈醉時歌〉と陳渾の〈桃源歌〉でも、李白の詩〈行路難其一〉と〈清障の明府にある甥事へ(贈清障明府侄事)〉などとの共通性が発見される。

金克己の〈醉時歌〉で叙情的主人公が自己の社会美学的理想のために苦悶しながらも、理想の実現する日を信じる点では、李白の詩〈行路難〉での詩精神と同じである。

金克己は「いつの日に暴風を越え、恐ろしい波をかきわけ、平和な世界に住めるようになるだろうか。(何時乘風破巨浪，座会四海如唐虞)」

と歌ったが、李白は「大風に乗り、大海の波を乗り越える時はきっと来るだろうから、その時こそ帆を高く揚げ、海原を渡ろう(長風破浪会有時，直掛云帆濟滄海)」と歌っている。金克己は、鬱憤に満ちたとき「刀で土を叩き大きく叫び(拔劍斫地空長吁)」、李白も鬱憤に胸が焦げるとき、「刀で水を切っても水はそのまま流れる(抽刀斷水水更流)」とした。金克己の詩の強い批判精神、過度な誇張法と比喩法は、李白の詩の誇張法、比喩法と共通性を持つ。

陳渾の〈桃源歌〉の「武陵桃源」の描写は、詩人の社会美学的理想に関わっている。この「武陵桃源」は現実逃避の思想ではない。なぜならばこれは、武臣政変後の腐りきった現実を否定し、新たな理想的社会への強烈な憧れから生まれた浪漫的な表現であるためだ。

陳渾のこの詩は、李白の詩〈清障の明府にある甥事へ〉の詩を連想させる。

李白は社会発展法則を知らなかったし、唐や封建社会が作り出す矛盾と不合理な社会を覆し、新しい理想的な社会を立てる方途を知らなかったために、自己が主観的に思考し、渴望する生活と理想をこの詩に反映した。このような理想は現実逃避ではなく、現実への関心と人民への同情から生まれるものである。だから、彼はこの理想を実現するために積極的に闘う態度を取った。

理想的な「武陵桃源」にたいする二詩人の描写は、封建官僚輩の苛酷な収奪がない社会を渴望する、詩人の理想的な志向と関連している。しかし封建社会にあってはただの志向であって、実現不可能な夢に過ぎない。ここにこの詩歌の浪漫主義傾向性の限界がある。しかし、この現実を批判し、否定し、別の現実—美しい理想的世界—に対する志向は当時の民衆の念願とある程度は符号する。まさに、ここにこの詩の進歩的意義があるのである。

前述した海左七賢の詩人とその影響下にあった詩人の浪漫主義傾向は、先行時期の文学的伝統を継承したものだ。新羅時期の崔致遠の〈双女塚(双女墳)〉などで浪漫主義的傾向が芽生えていたのである。崔致遠の創作法は、基本的に写実主義的な傾向にあるが、一部の作品は浪漫

主義的傾向を帯びている。

崔致遠の〈双女塚〉には李白との共通性も発見できる。李白は当時の封建的礼教に反対し、個我の解放と自由恋愛を主張した。崔致遠のこの作品でも当時の民衆に強要されていた封建倫理道徳と倫理的拘束を反対し、敢然と自由恋愛と個我の解放を主張しているのである。

崔致遠の〈双女塚〉の人物形象の性格だけでなく、彼らの対話、叙情的内容、言語駆使においても、浪漫的特性をはっきりと認めることができる。

崔致遠の作品系列でみると〈双女塚〉のような浪漫主義的傾向のものもあるが、より大きな成果は、朝鮮詩文学で写実主義的文学の土台を築いたことにある。

作家李奎報の創作方法は、基本的に写実主義的創作方法であったが、彼の初期作品は浪漫主義的創作方法によるものであった。

李奎報は詩と酒と琴をととても愛し、「三嗜好先生」と自称した。これは李白の嗜好と同じなため、人々は李奎報を朝鮮の李太白だとよんだ。陳聿は李奎報に対し、「朝鮮の優れた気質が、全ての形象において露出した。(滴仙気万象之外)」といい、さらに李奎報の詩が優れている点は、李白とも似ているが、道徳を強調し、風諭を展開する点においては白楽天と一派通じると評した。

李奎報は、初期に浪漫主義傾向の作品「東明王篇」と「天宝泳史詩」を創作した。李奎報は、「東明王篇」で高句麗を創建した高朱蒙の偉勲を芸術的画幅に描いて当時の現実社会を暴露、批判した。

我々は李白の多くの〈古詩〉で、燕昭王、漢高祖、周文王のような徳の高い王君を追慕し、殷紂王と楚懷王のような暴君や政治に蒙昧な玄宗とその奸臣を批判、暴露したように、歴史的人物形象を借りて当時の現実を批判した手法を発見する。しかし、この二詩人はそれぞれの独創性を発揮し、自国の現実と歴史的人物を借りて、徳の高い王君を追慕しているのである。

過度の誇張法は、浪漫主義創作方法の描写手法である。このような手法を李奎報の詩と、李白の詩に見ることができる。

天地を寢床にし、川の水を酒にして、
千日でも飲んでいたい。

天地為衾枕 江河作酒池
願成千日飲 醉過太平時
李奎報 〈醉吟〉

酔ったまま空山に臥す
天地がそのままふとんとまくら

醉来臥空山 天地即衾枕
李白 〈友人会宿〉

この二詩人の思想感情と誇張的手法は共通性がある。

ひとり座って^{きん}琴を爪弾き
一人歌いしきりに盃をあげる

独座自彈琴 独吟頻拊酒
李奎報 〈適意〉

二人がさしむかいで飲むと
山の花がかたわらで咲く。
一杯、一杯、もう一杯。
わたしは酔った、眠くなった。
きみよまあ帰り給え。
明日の朝その気になれば
^{きん}琴を抱いて来たれ。

両人对酌山花開 一盃一盃復一盃
我醉欲眠卿且去 明朝有意抱琴来
李白 〈山中與幽人对酌〉

この二詩人の詩の中で酒を愛し、音楽を愛好するのが共通点であるが、異なる点は李奎報は一人で酒を飲み、一人で^{きん}琴を弾くが、李白は二人さしむかいで酒を飲む。

次に、浪漫主義的創作方法の描写手法では、象徴的比喻を使うのが特徴的である。李白は詩〈遠別離〉で娥皇と女英の伝説、堯王が囚われ、舜王が野垂れ死んだと言う伝説を通して、当時の奸臣たちが権力をほしいままにし、混乱を極

めた政治に対し次のように描写する。

日光は薄暗く雲は暗く
猩猩はもやの中で啼き
幽霊は雨の中でキャーキャー泣く
(中略)

君主が良臣を失うと龍が魚になったようで
権力が臣下に移ると鼠が虎のようになる。

日惨惨兮雲冥冥，猩猩啼烟兮鬼嘯雨
君失臣兮龍為魚，權歸臣兮鼠變虎

崔致遠も新羅末期の統治輩を憎悪し、彼らの
狡猾性と暴悪性を批判した詩〈素朴な思い（古
意）〉で

狐は美人に化け、山猫は知識人になる。
誰が知ろうか、
獣が人間の仮面を被り世を惑わすとは。

狐能化美女 狸亦作出生
誰知弄類物 幻惑同人形

この二詩人は当時の統治輩を動物になぞら
え、辛らつな批判を加えていた。

李白は、動物や植物を借り、社会現象を批判
した。李白が〈古詩その四十〉で鶏のどん欲さ
と鳳凰の清廉さを対照的に描いたが、李奎報も
詩〈放蟬賦〉ですくい蜘蛛と蜘蛛の糸にかかっ
た蟬を対照的に描いている。李奎報は、蜘蛛を
働かずして徒食する支配階級に比喻して彼らを
憎み、蟬を被圧迫階級に比喻して同情を送って
いる。

李奎報の詩〈花妖〉でも唐玄宗が政治を奸臣
李林甫と楊国忠に任せ、妖姫楊貴妃に惑わされ
ているうちにやがて安史の乱がおこり、唐朝が
衰退していく歴史的事実を挙げ、当時の朝鮮社
会の朝廷の腐敗ぶりを暴露しているのだ。李白
も長安で翰林供奉としていた時、牡丹を鑑賞し
ていた玄宗から詩を作るよう命じられたので〈清
平調〉を作った。李白はこの詩で楊貴妃を、漢
の武帝の寵愛を受けた品行の悪い趙飛燕に喩え
て歌ったために、長安の高力士の讒訴を受け、

追われたのである。

李白は、自然現象を表現するとき性格化し形
象化した。このような手法は、李奎報の詩でも
見ることができる。

春風にも情があるかのように
柳の枝を掴んで舞を舞うなんて
春風如有情 吹舞絳腰柳

李奎報〈送韻朴還古南游詩〉

李白も〈待酒不至〉で

杯を口に当てたとき、
山花は私に向かってにっこり笑った。

山花向我笑 正好街杯時

李白は、龍も擬人化し描写した。

北斗七星にかぐわしい酒を注ぎ、
龍たちに一杯ずつ勧めてみたい。

北斗酌美酒 勸龍各一觴

〈短詩行〉

このような描写手法は李仁老の詩〈題天水寺
壁云〉にも見られる。

あの藪の中で提壺鳥だけがとまっている。
なごやかにさえずりながら
酒を飲むよう勧めん。

唯餘林外鳥 疑曲勸提壺

このような手法は朝鮮語の詩調でも見られる
が、ここでは紙幅の関係で割愛する。

以上で我々は李白が浪漫主義創作方法を使う
ようになった社会背景と、朝鮮での浪漫主義創
作方法が生まれるようになった歴史的環境を考
察し、中国・朝鮮の二国の詩人の浪漫主義作品
を比較してみた。この詩人の社会美学的理想は
神話的かつ幻想的手法や、歴史的事実によって

表現し、描写手法に過度な誇張法を使い、社会批判には象徴的比喩を使っているのを見てきた。

[2]

詩人李白は謝靈運ら、叙景詩派の芸術的伝統を継承し、祖国の麗しい自然を一幅一幅の風景画の中に描き出した。

ここでは、主に李白の叙景詩と関係のある詩を見てみたい。

まず、松江鄭澈（李王朝1537-1594）の〈関東別曲〉を見よう。

鄭澈は、この紀行歌辞で麗しい朝鮮の自然に対する民族的矜持を歌った。それは、この歌詞において「李滴仙^㉔ここにいて、よく話し合ってみたら、廬山がここよりもよいとは言えないだろうに」というところに見られる。

この歌詞の詩句で我々は松江鄭澈の巧みな比喩法と大げさな誇張に、李白の詩〈蜀道難〉での描写手法を連想させられる。二人の詩人はともに祖国の麗しい山河を誇り高く朗々と歌った。

鄭澈は李白の〈望廬山瀑布水〉

香炉峰の日が差し、霧は紫色にけぶる。
遙か彼方の滝水は、
前の川に垂らすよう三千尺直下を落下する。
天からこぼれ落ちた天の川かな

日照香炉生紫烟 遙看瀑布挂前川
飛流直下三千尺 疑是銀河落九天！

を念頭において歌った詩歌などは二詩人が瀑布を銀河に喩えているのが共通点である。

白砂の道、熟れた言葉が
酔仙を飾りたくて
海の側で海棠花を携える

この部分でも鄭澈は、自分を酔仙と自称している。これは李白が飲酒八仙人といったことと、どれだけ共通点があろうか。

詩仙はどこに行き、咳唾のみ残っている
天地間すばらしい知らせ、
詳しくするだろう？

松江鄭澈は、李白を詩仙と崇めている。咳唾とは目上の人という意味だが、ここでは、李白の詩〈登金陵鳳凰台〉の

いずれにせよ低い雲を垂れ
陽光を遮るので
わが都長安を見ることあたわず
わが心は悲しくなる！

の詩句を念頭において歌っている。

叢石亭に登れば、
白玉楼（天の玉皇上帝の宮殿）残る柱、
ただ四仙峰がそびえるのみ、
工倕^{たくみ}の匠であろうか、
鬼斧で磨いたのか

ここでも李白の詩〈戦乱の後、江夏太守為良宰へ〉での

天上白玉楼は五上一二楼

という詩句を念頭において歌っている。鄭澈のこの歌辞で「夢である人が私に言ったことが」以後の最後の部分を読めば、我々は李白の詩〈西上蓮花山〉での

恍惚たる心で、彼の後ろに従い、
雁に乗って高く舞い上がりながら、

恍惚与之志 駕鴻凌紫冥

の幻想的な部分と〈大鵬の歌〉等を連想させられる。

我々は松江鄭澈の〈関東別曲〉を読んで、李白との多くの共通点を発見するだろう。李白の創作方法は基本的に進歩的浪漫主義であるが、部分的な作品は浪漫主義と写実主義を有機的に結合させている。鄭澈の「関東別曲」も写実主

義と浪漫主義をうまく結合させている。李白は〈廬山瀑布を眺め〉〈蜀道難〉で祖国の美しい山河を歌ったとすれば、鄭澈も〈関東別曲〉で朝鮮の名山金剛山を民族的矜持感たっぷりに歌った。この描写手法においても神話伝説と歴史的人物を借りて形象化しているし、豊富な想像と幻想、過ぎた誇張、比喻、躍動的な言語表現、自由奔放な叙情などで表現しているのが共通性だ。鄭澈の幻想的手法は〈関東別曲〉だけでなく、〈思美人曲〉〈続美人曲〉の最後のところでもよく表れている。このような手法は李白の描写方法によく似ている。この他にも鄭澈の〈勸酒歌〉がある。鄭澈の〈勸酒歌〉では、李白の詩のように「虚しい人生を心ゆくまで楽しもう」といった人生に対する無常の消極的思想傾向も見られる。

16世紀の女流詩人黄真伊(1516-?)は、松都三絶^⑥の名妓であったが、国文による詩歌だけでなく漢詩にも長じていた。開城聖居山の朴淵瀑布の下の岩に刻まれた李白の詩〈廬山瀑布を眺める〉の漢詩句草書は、黄真伊が書いたものだといわれている。それだけ黄真伊は、李白の詩を愛誦し、深く理解していた。それゆえに朴淵瀑布を歌いながら、李白の詩の廬山瀑布と朴淵瀑布を比較したのであった。朝鮮詩人が祖国の瀑布の景勝を、李白の詩〈廬山瀑布を眺める〉に比喻しているのは、かれらが李白の詩に大きな魅力を感じていることに他ならない。

詩〈朴淵瀑布〉では、〈廬山瀑布を眺める〉で廬山瀑布を銀河に喩えたのに倣っている。しかしながら黄真伊は民族的矜持から

廬山景勝が佳いとて、
世間の皆様おっしゃるまに
朝鮮一のこの天磨山を見てちょうだい

と歌っている。

19世紀詩人で両班詩人たちとは異なった道を歩んだ金炳淵(1807-1863)すなわち金笠は特異なタイプの放浪詩人であった。金炳淵は彼が1864年、58才を一期に客死するまで、40年間朝鮮の三千里江山を浮草のようにさまよい歩き、放浪生活をした。李白にもまして不遇な境遇に

あった。

李白が中国全土の半分を遊覧したとすれば、金炳淵は朝鮮全国、津々浦々を訪ね歩いた。李白は遊覧初期には金を湯水のごとく使い、義侠心を発揮した遊覧生活であったが、金笠は朝鮮全道を民家に乞食しながら放浪したため、とてもみじめな放浪生活でもあった。李白は、天才的な詩の才能を持ちながらも、自己の理想を実現できないまま悲劇的一生のうちに客死した。金笠も天才的な詩の才能を持ちながらも、不合理な封建社会で一生放浪生活をし、客死する。李白がその当時、不合理な社会へ反抗したように、金笠も自己の個人的境遇から反抗児として打って出た。このように李白と金笠の性格的特質も近いものがある。李白の高邁な性格を王琦は『李太白全集』で「李白は体を曲げない。腰におごる骨があるためである。(李白不能屈身、以腰間有傲骨)」^⑦と評した。李白は長安の飲み屋で寝起きしながらも、玄宗の船遊びの誘いにのらずに、酒仙と自称した。また、宦官高力士に靴を脱がせまでした。彼は封建的倫理道徳をあしげにし、高官大爵から皇帝までも蔑視したが、金笠も封建官僚と士大夫の前で足を投げ出し寝ころがるなどして士大夫を蔑視した。

金笠は一生の間放浪生活をしたために、朝鮮の山河の美しさを歌った歌が多い。

浮壁楼に登ると

「三山が空の彼方に半分落ち
二つに分かれた川にはさまれて
白鷺洲が見える」

は李白の詩そのものであり、

腹立たしくも
いにしえの詩が私の詩句を奪うので
夕日に筆を投げ出し
そのまま楊州に戻らん

三山半落青天外 二水中分白鷺洲
古代文章奪吾句 夕日投筆下楊州
〈浮壁楼〉

この詩では、李白の詩〈登金陵鳳凰台〉の詩句を引用している。なぜならば浮壁樓の景色が金陵鳳凰台と酷似しているためだ。金笠はこの詩句を引用し、李白が自分の詩句を奪っていくからと言い、擱筆した。この詩で金笠の李白の詩への感嘆ぶりが表現されている。金笠は詩〈嘘を歌った詩〉でも李白の天才的な詩の才能を反語的な表現で高く評価した。

詩人李白は祖国の美しい錦繡江山を歌う時、それを自分の故郷の山河への愛と密接に関連させている。

峨眉山上の秋の半輪の月は
平羌江^㉔に影をうつして流れてゆく。
この夜わたしは清溪^㉕を出発して
三峽^㉖に向かう
なつかしい君を思えども見えず
渝州に下る。

峨眉山月半輪秋 影入平羌江水流
夜發清溪向三峽，思君不見下渝州
〈峨眉山月歌〉

この詩は李白が26才の時、四川を発つ時に書いた作品だ。朝鮮の諺に「月見を兼ねて君に会う」というのがある。中天に懸かる峨眉山上の秋の半輪の月は故郷の月でもある。その月をいま愛しの君も見ているはずである。君を思いながらその月を見つめる。君に対する愛と故郷に対する愛が溢れている。この詩はまた一幅の山水画でもある。画面には、雄大な峨眉山の峰が高くそびえ、悲しげな澄みきった秋空に半輪の月が懸かっている。その清い川の水には山が映っている。詩人は船に乗り、この恍惚たる景色を見ている。そして画面に現れてこよなくいい君への思いを描く。李白にとって峨眉山は美の化神でもある。彼は四川を離れても常に峨眉山の月を思っていた。

李白は詩〈月下独酌〉で、明月を友にして酒を飲むが、影まで入れると三人になる。醒めている時はともに喜びあい、酔ったあとはそれぞれ分かれ散る。いつまでも無限の交際をしようとはるかに天の川での再会を約束している。李

白は詩〈月の歌（古郎月行）〉で幼かった時の月への思いから始まり、月にまつわる伝説である羿射手と月との関係を歌っている。詩では、その遙かな昔に人々を豊かに暮らせるようにした羿射手を描き「今は月の精気がぬけて」「見にくく」（陰精此淪惑，去去不足觀）なった現実を憎悪している。ここでも我々は人民への李白の熱い愛を見、支配階級への激しい怒りを読むのである。

この他にも月を歌った〈国境の月〉〈三日月〉〈雨の涯に月を眺む〉等の詩がある。

では李白はなぜこんなにも月をめでののか。これについては文学史家王瑤が、彼の著書『李白』で「李白にとって明月はひとえに高潔で率直な象徴であった。」^㉗と評価するのも一理ある。李白は夜空に皎々と輝く月を「高潔で率直な象徴」と見ただけでなく、さらに進んで、自己の美しい理想と憧れの世界をそこに発見したのだ。自己の字を太白とし、彼の妹の名を月暄とし、息子の幼名を明月奴と呼んだのもそのためである。彼は自分の詩で「青天に上りて日月を攬らんと欲す」（欲上青天攬日月）〈宣州の謝朓樓で校書郎叔雲に餞別する〉とした。李白は混乱し俗悪であるばかりか、才能ある人物を正當に評価しない現実を嫌い、清澄で、皎々と輝く明月に自身の理想を重ね、月世界に憧れた。月のみが自己の心情を知ってくれるのである。李白が月とさしむかい自分と自分の影を含めた三人で、酒を酌み交わし舞を舞うのは、まさにこのためである。酒を飲むのも、才能ある人物を受け入れない社会で鬱積した気分を晴らすのに酒はこの上ないもので、酒を飲むことで喜悦を感じ、精神的な解放を得た。

朝鮮でも月を歌った詩は多い。尹善道の〈五友歌〉では李白のように月を友と見なしている。朝鮮の月見歌には李白が月を楽しんだ歌を民謡として歌ったものがある。

月よ、月よ、明月よ。
李太白の遊んだ月よ。
それぞれその月の中
月桂樹が植わってるので、
玉の斧で切り出し

金の斧で形どり
藁葺小屋を立てて
千年万年住みたいぞ

この民謡にも李白の理想を見いだすことができる。すなわち李白が不合理な現実を否定し、月の国に行って理想的な社会を探そうとする浪漫的な理想が反映しているのである。このような理想は朝鮮の勤労人民の理想でもあった。

14世紀前半期に活躍した李斎賢(1288-1367)は混乱した社会にうんざりして、月に思いを託している。

私の行く手をだれに聞こう、
唯あの月だけが心を汲み出す。

畢竟行藏誰与問、満窓霜月独鐘情
〈感懐〉

彼の別の詩〈題名のない歌〉で、月の世界と自己の思想感情を結びつけ次のように歌っている。

青い空、青い海のようなところ
月桂樹の下で姮娥が悩む。
白兎はいつも不老長生薬を搗くが
月が満ち欠けるにつれ紅顔は衰えん

青天碧海夜漫漫 秋殺姮娥桂樹間
白兎長年空搗药 一回圓欠減朱顔
〈無題〉

詩調にもこれに似たものがある。

白い露降りたのに、澄んだ月が戻り来る
鳳凰楼、妙なる青光を誰に与えん
白兎よ、おまえの搗いた薬を
豪傑にでも食べさせよう

これを李白の〈月歌〉と比較すれば、

三日月には神仙の二本の足が見え
満月には月桂樹がはっきり見える

白兎が搗く薬が出来たら
誰にやるのか、尋ねて見たよ

仙人垂兩足 桂樹何團圓
白兎搗药成 問言与誰餐
〈古郎月行〉

以上の詩で、詩人たちは例外なく月に自己の理想を託している。しかし李白は「白兎が搗いた薬を誰にやるのか聞いてみた」が、朝鮮詩人は「豪傑にでも食べさせよう」とか、「姮娥が悩む、——紅顔が衰えん」ので食べさせようとする。朝鮮詩人たちはそれぞれに独創性を発揮しているのである。

鄭澈の〈星山別曲〉でも

空に出た月、
松の木に懸かったらつかまえて、
こぼれた光は滴仙が贈呈しよう

といい、李白が月を捕えようとして溺死という浪漫的伝説を語りながら、李白に対する追慕の心情を示している。このように朝鮮の詩人たちは、月を李白の化神のように歌っているのである。

李奎報は李太白をとっても追慕し、彼の詩を高く評価した。〈私を滴仙と呼んだ友に〉〈李眉奥に捧げる滴仙の歌〉〈李太白の詩を読んで〉などの詩に、李太白への追慕の情があらわれている。

李奎報は〈李太白の詩を読んで〉で唐の国に数多くの詩人がいたが、李太白ほどの詩人はいなかったし、彼の詩が「絹の感触を思わす美しい詩（安可吐出翰林錦綃之肝腸）」であり、「雲の中をかすめ、翔んで来た羽根に似ている（己似寥廓凌云翔）」と高く評価している。

李奎報は「唐書杜甫伝の史臣の評伝について」で、李白の詩は朝鮮詩壇にその名声が「雷のようにとどろき、かつ北斗七星の光」（共名固己若雷霆星斗）のように皎々と輝いたという。⑩

李白への李奎報のなみなみならない追慕の情は、天才詩人への朝鮮人民の追慕の情の表現であり、李奎報が彼の詩を高く評価したのは朝鮮

詩人たちの見解を代弁したものである。

李白の文学遺産は中国人民のみならず、朝鮮人民、さらには全世界人民の精神的財富である。

日本の武部利男は自著『李白』の解説で、李白の詩が日本に与えた影響を次のように書いている。「海を隔てたわが国でも古今を通じて愛読されたが、〈白髪三千丈〉だとか、〈長安に月の光が溢れる〉という詩句は李白の詩を読んだ事のない人々の耳にもなじみ、民衆の心に浸透している。西洋においても東洋の詩人で最も歓迎される詩人はおそらく李白であろう。李白は真に中国最高の詩人であるばかりでなく、世界でも屈指の詩人である。彼の詩の読者がどれだけ多いか、計り知れない。」^⑩

このように全ての精神的富は人類の共同の財富である。

注

- ①海左七賢；1170年8月鄭仲夫の武臣政変により官職から追われ、迫害と弾圧を受けながら不遇な生活をした李仁老、林椿、呉世才、李湛之、皇甫沆、趙通、咸淳など七名の文人を指す。
- ②張公が研いでいた二本の宝剣のように；『晋書 張華伝』の話にある。西晋の時、宝城の雷煥が土の中から宝剣二本を掘り出したが、一本は張華に譲った。
- ③李滴仙；李白を指す。滴仙はもとは天で罰を受けこの世に流配された神仙という意味だが、詩人賀知章が李白をそう呼んだ。
- ④工倕；工倕は中国の有名な匠人で、舜王の時、工事を管轄していた人。
- ⑤松都三絶；開城の三名物。すなわち徐花の道教、開城の朴淵瀑布の絶景、黄真伊の美貌。
- ⑥1977年中華書局出版 王琦注釈『李太白全集』1623p.
- ⑦平羌江；四川省芦山県に源を発し、楽山県を通って岷江に入る青衣江を指す。
- ⑧清溪駅；四川省犍為県峨眉山付近の地名。
- ⑨三峽；長江上流四川省と湖北省境界にある瞿塘峽、巫峽、西陵峽などの総称である。
- ⑩1979年 上海人民出版社出版 王瑤著『李白』3p.
- ⑪1959年 朝鮮文学芸術書籍出版社出版『李奎報作品選集』第2巻 296p.
- ⑫岩波書店発行 武部利男注釈『李白』上巻 解説8p.

※李白の詩の訳出にあたっては、『唐代詩集上』（中国古典文学大系17 田中克巳他編訳 平凡社）を参考にした。